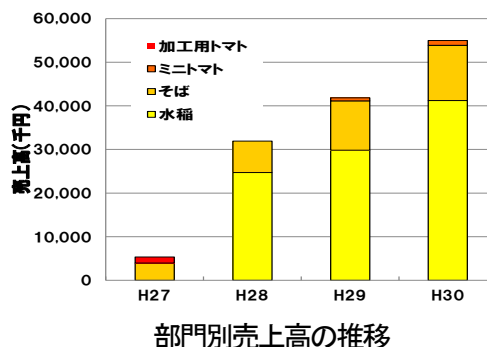


地域農業の将来を見据えた組織づくり — 次世代への「さきがけ」と成らん —

農事組合法人 魁（さきがけ）
代表理事 鈴木 文雄（尾花沢市）

1 受賞者の概要

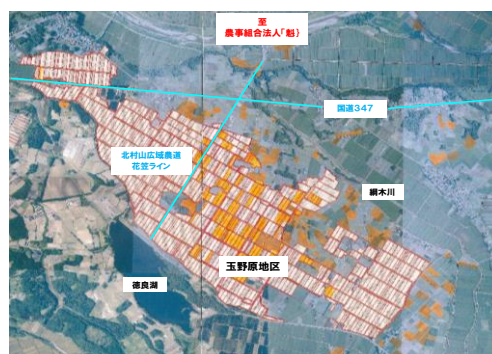
「農事組合法人 魁」は、地域の農業従事者の高齢化や後継者不足を背景に「今後、自分達が受託作業を満足に行えなくなった場合、その後、誰が地区・地域の農地と栽培管理を引き受けるのか？」という危機感を持った作業受託組織の構成員が「次世代を担う優秀な農業後継者の育成・確保と技術の継承」という高い理想の元、平成27年に組織を法人化し、経営規模の拡大と複合経営により、着実に売上高を伸ばしている。



2 特色ある活動

(1) 意志決定および農地集積・集約の迅速化

構成員間に地域農業の維持・発展に向けて協力する意識が醸成され、地区・地域農業の将来像を想起し、新しい試みに挑戦する「地域に魁ける」という迅速な意志決定体制が確立された。また、情報の共有化も迅速になり、法人名義での農地取得・賃借も可能となり、遊休農地の情報収集と集積・集約等、状況に応じた活動が実施されている。



管理するそば畑の一部、玉野原（約50ha）

(2) そばの大規模作業受託・水稻の大規模栽培における生産基盤の安定化

「魁」のそばは、市内に設置された採種圃場で自主生産した「最上早生」を種子として栽培され、平成30年には約105haの栽培面積となっている。一方、水稻（約31ha）は、早生、中生、晩生品種を計画的に作付けしている。そばと水稻の管理は、作業競合を回避するよう工夫して播種から収穫、乾燥・調製、出荷（農協）まで一元的に丁寧に行い、収量・品質ともに良好（そばも米も全量一等）である。

(3) 保有施設を有効活用した園芸作物栽培への取組み

農業の魅力を後継者へ伝えるため、水稻の育苗後、遊休施設となるパイプハウスを有効活用しミニトマトの栽培に取り組んでいる。隔離床養液栽培システムを導入し、現在、収量・品質を向上させつつ収益を上げ始めており（全量契約栽培）、規模拡大を計画している。

3 今後の発展方向

「次世代を担う優秀な後継者の育成・確保と技術の継承」を運営の柱とし、地域の農業を守りつつ後継者へ円滑に引継げるよう、また、法人化のメリットを生かしたコスト削減等の経営改善や新規作目導入による経営の多角化・周年化等を、法人の名称同様「地域に魁けて」果敢に挑戦していきたいと考えている。